

軍 事 史 学

第55卷 第2号

卷 頭 言

「羅生門効果」の克服へ

赤木 完爾

学術誌『インテリジェンスと国家安全保障』がロンドンで創刊されたのが一九八六年である。当時インテリジェンス研究が学問として可能であるかどうかについて懐疑的な向きもあったようだが、三〇年あまりを経た今日、少なくとも英語圏においては研究領域として確立されたと思われる。翻ってわが国においては、依然としてごく一部の研究者を除いて、この研究領域の重要性の認識が広く受け入れられていないとは思われない。史料の状況や知的風土、政治文化との関連から、そうした傾向を説明できなくもないが、根本にあるのは、国家活動の基礎としてインテリジェンスが不可欠であることへの無関心であろう。

けれども、入手可能な最善の真実を求めようとすることは、それが国家の政策決定のためであれ、個人の生活上の取り組みであれ、健全な意思決定には不可欠のものである。ところが、近年においてはソーシャルメディアの爆発的な発達を基盤として、フェイクニュースや嘘の流通が真実を切り崩していく現象が、にわかには顕著となってきた。その帰結がたとえば政治の世界での大衆迎合の世界的蔓延であろう。

組織的な偽情報 (disinformation) 操作はソ連が一九二〇年代から始めたものであった。冷戦中には、あたかも工場での大量生産のようにそうした工作が続けられた。冷戦終結後も同様に、ロシアは他国の選挙に影響を与え、あるいはウクライナとの紛争を有利に運ぶことをめざして偽情報を流していた。もとより今日それに類する活動を行っている国家はロシアにとどまらない。さらに国家以外の素性不明の集団やテロリストですら、巧妙なプロパガンダの手法をとって偽情報を流通させている。

一つの出来事について人々が複数の異なった見解を主張して矛盾が生じることを黒澤明の映画になぞらえて「羅生門効果」と呼ぶ。相対主義の影響によって客観的實在なるものが危うくなっている現状は、嘘が流通する文化的背景である。こうした趨勢に抗するための手立ては、一見迂遠であるが、インテリジェンスの多様な側面に関する歴史研究の蓄積である。入手可能な最善の真実を求めるための必要条件是、しっかりと歴史研究を読むことをつうじて「羅生門効果」を幾分かでも克服することではなからうか。こうした意義において、インテリジェンスに関する歴史研究の深化は現代において喫緊の課題である。

(慶應義塾大学名誉教授)